

元・郭居敬撰『全相二十四孝詩選』系諸本の 成立と展開について

宇野 瑞木

一、はじめに

二十四孝とは、古代中国の家族倫理である「孝」を实践した孝子の事跡を二十四集めた、孝子説話のダイジェスト版ともいべきものである。その成立については未だ不明な点が多いが、敦煌文書の中に「故圓鑿大師二十四孝押坐文」^{〔1〕}とあることから、五代宋初には二十四孝が講経僧によつて語られていたことが知られる。その後、少なくとも十四世紀には二十四孝の諸版本が現れ、日本にも陸續と齎された。

本稿では、日本に舶来した二十四孝の諸版本のうち、特に二十四孝の受容の初期段階に重要な役割を果たし、江戸時代の二十四孝流行の土台を成した元・郭居敬撰『全相二十四孝詩選』に着目し、その詩・図・伝の形式の成立経緯、編纂意図、性格について考察を行う。具体的には、現存する貴重な中国国家図書館蔵刊本と日本に伝存する諸写本から明初の洪武年間（一三六八―一三九八年）刊本と嘉靖二十五年（一五四六年）刊本を復元し、両者の内容の異同を検討することで、それぞれの版本の性格について検討する。さらに、これまであまり注目されてこなかった図像・文字資料も含めて、『詩選』成立に至る過程について整理し、その成立背景についても考察を試みたい。

二、二十四孝の三系統

日本に齎された二十四孝の諸本は、その選出された孝子の顔ぶれによって、主に次の三系統に分けられる。⁽²⁾

高麗版『孝行録』

元・郭居敬撰『全相二十四孝詩選』⁽³⁾

明刊『日記故事』系統⁽⁴⁾

『孝行録』は、元の至元六年（一三四六年）に、高麗の権準が画工に描かせた二十四孝図に李斉賢が賛を着け、さらに権準の父・権溥がさらに三十八章の賛を追加して成った書で、後に権準の孫の権近の注解本が李斉賢の詩文集『益齋乱藁』の附録として至元二十三年に（一三六四年）に刊行された。日本には、応永二十二年（一四一五年）までには渡来していたようである。⁽⁶⁾

本稿で中心的に取り上げる『全相二十四孝詩選』（以下、『詩選』と略称）は、『孝行録』と同じ時期に編まれ、おそらくは出版されたものと考えられるが、元刊本は現存しない。現存最古の版本は、明初の洪武年間に刊行されたと目される中国国家図書館蔵本（以下、国家図書館本と略称）で、一丁分の欠落があるものの唯一の現存刊本として貴重である。『詩選』の渡来時期は不明であるが、その受容に拍車がかかるのは室町後期に入ってからで、永禄、元亀・文正以降、盛んに書写・注釈活動、及び絵画化、和文化が進むと同時に、『孝行録』も参照されるようになる。この二十四孝ブームとも呼ぶべき現象の一つのきっかけとなったのは、嘉靖二十五年（一五四六年）刊『新刊全相二十四孝詩選』の舶来であったと考えられる（後述）。

『日記故事』系統本は、『詩選』と同じ福建の地において、宋末元初の虞韶編『日記故事』の巻首に『詩選』とほぼ同内容の（二孝子が入れ替わっている）⁷二十四孝が付された諸刊本である。この系統の刊行年が明らかかなものでは萬曆三十九年（一六一一年）刊『新鐫徽郡原板校正繪像註釈便覽与賢日記故事』（国立公文書館蔵）が最も古く、橋本氏は伝存刊本の状況から見て、この系統が現れるのは萬曆三十年（一六〇二年）代以降と推定されている⁸。但し、室町末期の繪画・彫刻作品も勘案すると、『日記故事』系統の挿図の成立及び渡来時期については元龜元年（一五七〇年）頃まで遡る可能性がある⁹。この系統は、寛文九年（一六六九年）に『新鐫類解官様日記故事大全』が和刻され、江戸初期には既に『詩選』の原本が入手困難となっていたこと¹⁰もあり、より影響力を持つようになっていった。

しかし、二十四孝のお伽草子（和文）のもとになったのは『詩選』であり、それが江戸時代の二十四孝受容の土台を成したのであった。そこで本稿では、『詩選』を中心に据えて二十四孝の成立と展開を考察してみたい。まずは、その明初刊本及び嘉靖二十五年刊本の復元作業から始めることにしよう。

三、『全相二十四孝詩選』刊本二種の復元——日本の諸写本を手掛かりとして

先述のように、現在、最古かつ唯一の『詩選』の刊本は、中国国家図書館蔵『全相二十四孝詩選』である。【図1】のように、上図下文形式で、半丁に二話分が配され、各話に図・詩・伝を有する構成となっている。

本書の存在については、夙に『中国版画史図録』（周蕪編、上海人民美術出版社、一九八八年）第一一六図に「明初刊本」として冒頭の書影が紹介されていたものの、その後長らく所在が不明であった。一九九五年に橋本章子氏によって国家図書館所蔵の一本が見いだされ、その書影の前半部が紹介された¹¹。これを受けて、筆者は国家図書館本の



【図1】中国国家図書館蔵『全相二十四孝詩選』〔橋本 一九九五・一〕

後半部に関して挿図部分のみを紹介しながら日本の二十四孝図の展開について論じたことがあるが、その後、橋本氏によって後半部の書影全体が紹介されたことで、ようやく全貌が知られるところとなった。但し、現存唯一の刊本である国家図書館本は、残念ながら一丁分にあたる四話分が欠落している。

この欠を補う材料として、日本において元亀・天正頃から慶長・寛永頃にかけて盛んに書写された写本類が注目される。先述のように、室町後期から江戸初期にかけての時

期には、二十四孝熟とも呼ぶべき禅林・儒家を中心とした書写・注釈・詩作の活動、および周辺の貴族・武家層も含めた絵画化・和文化の盛んな動きが確認され、これら諸写本において刊本の当時の姿をある程度復元することが可能と考えられるのである。

日本に現存する『詩選』関係の諸写本については、主として説話配列により橋本草子氏が左のごとく整理されており、その分類を参考にしながら見ていくことにする。

《日本における『詩選』書写本の説話配列順による分類》

第一（洪武系・中国国家図書館蔵刊本系）

① 「全相二十四孝詩選」(身延文庫蔵、斯道文庫蔵マイクロフィルム)

第二(詩註本系)

② 「全相二十四孝詩選」(川瀬一馬氏旧蔵、国文学研究資料館マイクロフィルム ト4―2―1) 室町中期写

③ 「全相二十四孝詩選」(お茶の水図書館成篋堂文庫蔵) 天正十六年(一五八八年) 識語

④ 原題不詳「二十四孝カナ抄」(鴨脚家旧蔵、国文学研究資料館マイクロフィルム ト4―2―3) 慶長九年(一六〇四年) 撰述、寛永十三年(一六三三年) 写

第三(清家本)

⑤ 「二十四孝注」(龍谷大学禿氏文庫蔵) 元龜三年(一五三二年) 清原枝賢與書、天正十九年(一五九一年) 写
(橋本氏によれば「⑥の内容を旅先で記憶に基づき書いたもの」)

⑥ 「二十四孝詩註」(静嘉堂文庫蔵) 天正十四年(一五八六年) 写。「逆耳集」「金句集」と合写。伝は漢字カタカナ交じり文。

第四(嘉靖二十五年刊本系)

⑦ 「新刊全相二十四孝詩選」(斯道文庫蔵「廿四孝詩」所収) 仁如集堯写 挿絵付

⑧ 「新刊全相二十四孝詩選」甲本(龍谷大学写字台文庫蔵) 嘉靖廿五乙巳年刊に拠る写本

⑨ 「新刊全相二十四孝詩選」乙本(龍谷大学写字台文庫蔵) 同右の挿絵付

⑩ 「新刊全相二十四孝詩選」(『月庵醉醒記』三弥井書店、二〇〇七年所収) 一色直朝(?)(一五九七) 撰。伝は漢字平仮名交じり文

元・郭居敬撰「全相二十四孝詩選」系諸本の成立と展開について



【図2】斯道文庫蔵写本『廿四孝詩』のうち「新刊全相二十四孝詩選」〔橋本 二〇〇八・一〕

- ⑪ 「新刊全相二十四孝詩選」(京都大学平松文庫蔵)平松時庸(一六五四)写。
- 第五(嵯峨本系)
 - ⑫ 嵯峨本「二十四孝」(東洋文庫、成篁堂文庫、神宮文庫)
 - ⑬ 嵯峨本摸刻本
- 第六、その他、独自の配列を示す写本。
 - ⑭ 「全相二十四孝詩選」慶長六年写本(台湾故宮博物館蔵)
 - ⑮ 「新刊全相二十四孝之詩」(慶應義塾大学三田メ

ディアセンター蔵 110X—404—1)

まず、日本に刊本が渡来した可能性について検討したい。第四グループ⑪京都大学平松文庫蔵、平松時庸(一六五四)書写の『廿四孝傳並贅』二冊に所収された五言詩と伝を持つ「新刊全相二十四孝詩選」(⑪)には、「東光寺礼松首座以唐印本写之」という注記があり、もともとの底本が刊本であったことを示唆する。この「唐印本」の書影を窺わせる貴重な写本が、これと説話所収順が一致する第四グループの⑦斯道文庫蔵本である【図2】。

斯道文庫藏『廿四孝詩』は二十四孝に関する写本・注釈類を合冊したもので、第一から第六丁の「新刊全相二十四孝詩選」(⑦)には、【図2】のように上図下文の書影が挿図も含め写し取られている。第十一丁の末尾に「從此張前拾壹枚仁和尚自筆」とあり、相国寺鹿苑院の第九十一世塔住職・仁如集堯(一四八三―一五七四)の手になったものと知られる。斯道本(⑦)及び平松本(⑪)の説話順を示すと、次の通り(傍線部は、国家図書館本で欠落している説話)。

- 第一丁… 1 大舜 2 漢文帝／3 丁蘭 4 孟宗
第二丁… 5 閔損 6 曾參／7 王祥 8 老萊子
第三丁… 9 姜詩 10 黄山谷／11 唐夫人 12 楊香
第四丁… 13 董永 14 黄香／15 王裒 16 郭巨
第五丁… 17 朱寿昌 18 刻子／19 蔡順 20 庾黔婁
第六丁… 21 呉猛 22 張孝張礼／23 田真 24 陸績

斯道本(⑦)については、同じく第四グループの龍谷大学甲乙本(⑧⑨¹⁶)と本文がほぼ一致し、成立圏を共有していることが指摘されている。¹⁷ 注目すべきは、西本願寺の准如上人の手沢本である龍大甲本(⑧)の末尾近くに原刊本の刊記とらしい写し(「時嘉靖廿五乙巳年刊」)が有る点で、これにより第四グループが、嘉靖二十五年に新刻された『新刊二十四孝詩選』系統であることが確認される。¹⁸ また嘉靖二十五年刊本は、洪武年間刊本の国家図書館蔵本とは説話所収順が異なっていたことも明らかになるのである。¹⁹

これに対し、国家図書館本と一致する説話順を持つ写本に第一グループ①身延文庫本『全相二十四孝詩選』があ

る。その説話順は下記の通りである。

- | | | | | |
|------|-------------------|-------|-------|--------|
| 第一丁… | 1 大舜 | 2 漢文帝 | 3 閔損 | 4 曾參 |
| 第二丁… | 5 王祥 | 6 老萊子 | 7 丁蘭 | 8 孟宗 |
| 第三丁… | 9 黄香 | 10 董永 | 11 姜詩 | 12 蔡順 |
| 第四丁… | 13 唐夫人 | 14 呉猛 | 15 劔子 | 16 庾黔婁 |
| 第五丁… | (郭巨 朱寿昌 / 王裒 黄山谷) | | | |
| 第六丁… | 21 張孝張札 | 22 田真 | 23 楊香 | 24 陸績 |

この配列を見れば、欠落しているのは五丁目であることが推察されるが、金文京氏が国家図書館にて原本を实見され、欠丁が確かに五丁目であることを確認された。なお、身延本の「11姜詩」と「黄山谷」は、紙面スペースの問題か、或いは写し忘れたか、頭注にあたる箇所¹¹に補写されている。したがって、国家図書館本に欠落している五丁目内における黄山谷の位置は、依然として不明なままである。

そこで次に、川瀬一馬氏が「我が現存最古の伝本たる室町中期書写の一本(家藏²¹)」として紹介した第二グループ②「全相二十四孝詩註」も参照してみたい。

- | | | | | |
|------|---------|-------|-------|--------|
| 第一丁… | 1 大舜 | 2 漢文帝 | 3 閔損 | 4 曾參 |
| 第二丁… | 5 王禪(祥) | 6 老萊子 | 7 丁蘭 | 8 孟宗 |
| 第三丁… | 9 黄香 | 10 董永 | 11 姜詩 | 12 唐夫人 |
| 第四丁… | 13 蔡順 | 14 呉猛 | 15 郭巨 | 16 朱寿昌 |

第五丁… 17 刻子 18 庾黔婁 / 19 黃山谷 20 王褒

第六丁… 21 楊香 22 陸績 / 23 田真 24 張孝張札

②の配列は、「11姜詩」までは国家図書館本と完全に一致するが、「12唐夫人」「13蔡順」は先後入れ替わっており、第六丁の「21楊香 22陸績」と「23田真 24張孝張札」の各半丁のセットも前後逆に入れ替わっている。しかし、「郭巨・朱寿昌」と「黃山谷・王褒」が各半丁のセットであつたことが窺えるのであり、先の①の説話順は概ね妥当といえそうである。

なお、この②「詩註」と同じ第二グループに分類されている天正十六年（一五八八年）の識語を持つ③成實堂文庫藏「全相二十四孝詩選」（末尾の内題は「全相二十四孝詩」）は最後の三話の順序が異なるだけである（22張孝張札、23田真、24陸績）。橋本氏は、この第二グループについて、「中国でもこのような孝子の配列をもつ『詩選』が刊行されてきた可能性を示唆する」と注目すべき見解を示している。⁽²²⁾この点は後で検討したい。

以上、配列順序は、日本における書写段階で何らかの理由・用途により大幅に変更された可能性に十分留意する必要があるが、身延本に洪武本系の配列が留められていた点からも、諸本系統を見極める上で看過できない要素であるといえよう。

四、洪武年間刊本と嘉靖二十五年刊本の五言絶句および伝の異同

前節において、説話配列順によつて洪武刊本系と嘉靖二十五年刊本系の違いが確認されたが、その五言絶句と伝の内容については、これまで細かく検討されたことはないようである。橋本氏は、第四（嘉靖二十五年刊本系）の「五

言詩及び伝」が第一（洪武系）①及び第二（詩註系）②③と「ほぼ同じ」或いは「同じ」であるとし、第五（嵯峨本系）も「五言詩は①②③と共通」としており、特に区別されていなかった。

しかし、洪武本系と嘉靖本系は、配列が異なるだけで、五言詩と伝は同内容と言えるのであろうか。そこで次に、洪武年間刊の国家図書館本（A）の五言絶句について、第一グループ（洪武本系）の身延本（①）、第二グループ（詩註本系）の「詩註」（②）及び第三グループ（清家本）の「詩註」（⑥）、第四グループ（嘉靖年刊本系）の斯道本（⑦）・龍大甲本（⑨）を比較してみると【表1】（本論文末尾）のようになる（異体字は基本的には異同とみなさない）。なお、現行の二十四孝として、『日記故事』系統から、寛文九年（一六六九年）和刻本『新鍔類解官様日記故事大全』²³を参考までに加えた。

【表1】を見ると、国家図書館本（A）の五言絶句は、身延本（①）及び「詩註」（②⑥）に近く、嘉靖二十五年刊系の斯道本（⑦）及び龍大甲本（⑧）とは有意な異同が存在することが判る。具体的に見ていくと、国家図書館本（A）の4曾参「肩薪婦未晚」は、嘉靖刊本（⑦⑧）では「負薪婦来晚」となっているが、身延本（①）及び「詩註」（②）は国家図書館本（A）と一致している。同様の事例が、7丁蘭「身」（A①②⑥）―「新」（⑦⑧）、9黄香「炎」（A①②⑥）―「夏」（⑦⑧）、10董永「妃」（A①②⑥）―「姬」（⑦⑧）、12蔡順「萱」（A①②⑥）―「親」（⑦⑧）にも確認できる。

一方で、身延本（①）には明らかな誤字が散見する。例えば、2「延」は「廷」の誤写、21「亨」は「烹」の誤写であろう。さらに5「継母人間有」に至っては、「継母」の「継」の字がなぜか句末に移されている。しかし、こうした誤写・誤字を除けば、身延本（①）の五言絶句は、ほぼ国家図書館本（A）と一致することになる。²³「詩註」

②も誤写・誤字が多く、13「興」は「盟」の誤写、14「色」は「多」の誤写、22「庭」は「底」の誤写、24「弟」は「悌」の誤写であろう。一方で、2「漢帝」、6「喜氣」、11「泉水」、12「給米」、15「不敢」など、誤写以上の意味のある異同も含み、そのうち「喜氣」「泉水」「給米」は静嘉堂文庫蔵「二十四孝詩註」(⑥)と一致を見る点が目される。②⑥両者の関係が深いことは間違いないが、直接の書写関係にないことは、22「海底紫珊瑚」(A)をそれぞれが「海底紫珊瑚」(②)、「海底柴珊瑚」(⑥)のように異なる部分において誤写している点などから窺える。したがって、両者の特異な表現の一致は、洪武本と近いが細部において少し異なる一本が、両者の祖本として想定し得ることを示している。

以上、五言絶句について検討してきたが、伝の異同はどうなっているであろうか。漢字カナ交じり文の「詩註」⑥の伝を抜かした諸本(A①②⑦⑧)の伝に閲して、誤写、誤字を除く有意な異同と考えられる部分を見ていくと、①②は概ねAと一致することが確認される。今試みに5王祥までの顕著な異同のみ書き出してみると、次の通りである。

1 大舜 異同なし

2 漢文帝 「湯葉」(A①②) — 「葉」(⑦⑧)

3 閔損 「所生子衣以綿絮」(A①) — 「所生子衣綿絮」(②⑦⑧)

4 曾参 「名参字子輿」(A①)・「名参字子輿」(②) — 「名参字恭輿」(⑦⑧)

5 王祥 「欲諧之」(A①②) — 「数諧之」(⑦⑧)

「天暁」(A①②) — 「天寒」(⑦⑧)

以上、日本に伝存する室町中期から初期にかけての『詩選』関連の写本に関して、配列順のみならず内容（詩・伝）も含めて調査した結果、日本における『詩選』の受容は、少なくとも洪武年間刊『全相二十四孝詩選』系統と嘉靖二十五年刊『新刊全相二十四孝詩選』系統の二種においてなされていたこと、さらに、『詩選』系統の中には、洪武本系と細部において異なる一本、いうなれば「詩註本系」(②⑥)が伝わっていたことが明らかになった。②の内題には本文と同筆で「全相二十四孝詩註」とあり、⑥の本文末尾にも「二十四孝詩註」とあり、『全相二十四孝詩註』なる一本があったのであろう。先述のように、橋本氏は第二グループについて「中国でもこのような孝子の配列をもつ『詩選』が刊行されていた可能性」を示唆されたが、中国で存在したかについては検討を要するにしても、少なくとも室町末には、橋本氏が第二に分類した「詩註本」系統（本調査において、第三に分類した清家本系も本文において同系統と判明）が存在したことが知られるのである。

また橋本氏が「五言詩及び伝」について、第四グループと第一グループを「同じ」とみなしていた点については、本節における特に五言絶句に関する異同調査によって、洪武本と嘉靖本との間で明確な差異が存在することが明らかになった。以上の調査を踏まえて、写本系統を再整理し、改めて分類を示すと次のようになる。

A (洪武年間刊本『全相二十四孝詩選』系)

第一 (洪武本系) ①

第二 (詩註本系) | (詩註本系) ②③④・(清家本) ⑤⑥

第三 (洪武本及び別系諸本混在系) ⑭⑮⑯⑰⑱

B (嘉靖二十五年刊本『新刊全相二十四孝詩選』系)

第四 (嘉靖二十五年刊本系) ⑦⑧⑨⑩⑪

第五 (嵯峨本系) ⑫⑬

以上、日本に伝存する『詩選』関連の諸写本の系統について、従来の説話配列順のみならず五言絶句の異同も検討した結果、日本に渡来した『詩選』は、大きく洪武年間刊本系統と嘉靖年間刊本に分かれ、さらに洪武本系統の中に洪武本 (国家図書館本) 系統と詩註本系統の二つが行われていたことが明らかになった。

五、『詩選』の二種刊本の渡来時期と経緯について

ここで、『詩選』の刊本の日本への渡来の経緯について考察しておきたい。まず、嘉靖二十五年刊本の渡来の可能性についてであるが、残念ながら日本には版本自体は現存しないものの、仁如集堯 (一四八三―一五七四) が上図下文の書影そのままに写し取った斯道本の存在から、嘉靖二十五年刊の『新刊全相二十四孝詩選』が仁如周辺にあったことは、ほぼ疑いない。但し、仁如自らが労を厭わず上図下文の書面そのままに写したとすれば、版本自体は仁如の持ち物ではなく、誰かから一時的に借りて書写したと考えるべきである。その人物として最も蓋然性が高いのは、天竜寺の塔頭妙智院の住職であった策彦周良 (一五〇一―一五七九) であろう。策彦は仁如とともに永禄九年 (一五六六年) に聖護院門跡道澄の求めに応じ、「二十四孝図屏風」に賛を寄せるなど、二十四孝を貴族・武家層に広めた中心的人物である。嘉靖二十五年 (一五四六年) は日本では天文十五年に当たるが、その翌年に策彦周良は二回目の入

明を果たしている。すなわち、刊行されたばかりの『新刊全相二十四孝詩選』を策彦が入手し、同十九年（一五五〇年）に持ち帰った可能性も十分考えられる。³⁰ 川瀬一馬氏が「文明・長享から永正・大永の頃には、未だ禅僧等の一部分に行なわれるのみで、やうやく天文頃を境として元龜・天正頃から広く流传する様になつた」と述べていたが、そのブームのきっかけが策彦の持ち帰った刊行されたばかりの嘉靖二十五年刊本だったと考えれば、策彦の帰国後、策彦を中心とした二十四孝をめぐる動きが活発化するのも説明がつく。³² また、策彦が再入明した頃は、宮廷付近でも二十四孝図が制作されることがあった。明・嚴嵩撰『鈴山堂集』卷十六詩（嘉靖二十四年刻增修本）には、嘉靖二十年（一五四二年）に嘉靖帝の権臣・嚴嵩（一四八〇～一五六七）が宿直した折に褒美として「二十四孝図の扇面」を皇帝から賜ったことに関わる詩が収められている。³³ このことから、二十四孝は比較的安価な版本のみならず、当時において権門の間で遣り取りされるような画題でもあったことが知られる。策彦も入明の際に金の扇面などの美術品を贈り物として持参しており、何らかの形で絵画としての二十四孝図を目にした可能性もあるだろう。³⁴

一方、洪武年間刊の『全相二十四孝詩選』についてはどうであろうか。身延本①の存在から、日本でも洪武本系統が享受されていたことは間違いないが、川瀬氏が詩註本②を室町中期写とするのを信ずれば、嘉靖本が渡来するより早い時期に洪武本系統の書写本が存在したことになる。³⁵ 但し、先述のようにこの詩註本系統は洪武本系統の中にあつて独自の本文を含む。これと同系統の静嘉堂文庫蔵「二十四孝詩註」⑥は、天正十四年（一五八六年）写で、末尾に「此本清家以秘本写畢」と記されている。先述のように、洪武本系統の中で独自本文を共有する詩註本系統②⑥は直接の書写関係にないことから、日本で洪武本が伝写される際に、解釈が加えられた一本が、両者の祖本として想定されるのであり、その系統の一つが清原家に大事に伝えられていたということであろう。

なお、室町末に成立したと考えられる第五グループの⑫嵯峨本（お伽草子）「二十四孝」は、五言絶句の系統から嘉靖本系であることが明白であり、嵯峨本（お伽草子）の和文化的動きが第四グループの周辺から派生的に生まれてきたことも確認されるのである。

六、五言絶句について——洪武年間刊本（国家図書館本）と詩註本、嘉靖二十五年新刊本

第四節において、日本の資料から『詩選』の刊本二種の姿の復元を試みたが、本節では、洪武本・詩註本と嘉靖本の五言絶句に関して、なぜ異同が生じているのか、またそれぞれにどのような特徴が見いだせるかという点について、諸本比較を通して検討したい。まず、以下に洪武刊本（国家図書館本）の五言絶句を書き出し、へへ内に詩註本②、（）内に嘉靖二十五年本（斯道文庫本⑦）における異同を示す。なお、欠落している17～20は、基本的に身延本①に拠った。

- 1 大舜……………隊々耕春象、紛々耘草禽、嗣堯登宝位、孝感動天心
- 2 漢文帝……………仁孝臨天下、魏々冠百王、漢廷（帝）事賢母、湯藥必親嘗
- 3 閔損……………閔氏有賢郎、何曾怨晚娘、尊前留母在、三子免風霜
- 4 曾參……………母指纒方嚙、兒心痛不禁、肩（負）薪婦末（来）晚、骨肉至情深
- 5 王祥……………繼母人間有（在）、王祥天下無、至今河水上、一片臥冰摸
- 6 老萊子……………戲舞學嬌癡、春風動綵衣、雙親開口笑、喜色（氣）滿庭闈

元・郭居敬撰『全相二十四孝詩選』系諸本の成立と展開について

- 7 丁蘭……刻木為父母、形容在日身(新)、寄言諸子姪、聞早孝其親
- 8 孟宗……淚滴朔風寒、瀟々竹數竿、須臾春筍(笋)出、天意報平安
- 9 黃香……冬月温衾煖、炎(夏)天扇枕涼、兒童知子職、千古一黃香
- 10 董永……葬父貸方兒、天妃(姬)陌上迎、織纈償債主、孝感尽知名
- 11 姜詩……舍側甘泉出(水)、一朝双鯉魚、子能知事母、婦更孝於姑
- 12 蔡順……黑椹奉萱(親)闈、啼飢淚滿衣、赤眉知孝順、告(給)(牛)米贈君婦
- 13 唐夫人……孝敬崔家婦、乳姑晨盥(興)梳、此恩無以報、願得子孫如
- 14 吳猛……夏夜無帷帳、蚊多(色)不敢揮、恣渠膏血飽、免使入親闈
- 15 刺子……老親思鹿乳、身掛褐毛衣、若不(不敢)高声語(叫)、山中帶箭歸
- 16 庾黔婁……到縣未旬日、椿庭遭疾深、願將身代死、北望啓憂心
- 17 郭巨……貧乏思供給、埋兒願母存(有)³⁶、黃金天所賜、光彩照寒門
- 18 朱壽昌……七歲生離母、參商五十年、一朝相見面、喜氣動皇天
- 19 王裒……慈母怕聞雷、水魂宿夜臺、阿香時一震、到墓遶千廻
- 20 黃山谷……貴顯聞天下、平生孝事親、汲泉涓溺器、婢妾豈無人
- 21 張孝張札……偶值綠林兒、代烹(亨)云瘦肥、人皆有兄弟、張氏古今稀
- 22 田眞……海底(庭)紫珊瑚、群芳總不如、春風花滿樹、兄弟復同居
- 23 楊香……深山逢白額、努力搏腥風、父子俱無恙、脫身纔口中

24 陸續……孝悌（弟）皆天性、人間六歳児、袖中懷緑橘、遺母報含飴

以下、誤写と判断されるものを除く、特徴的な異同が生じている詩句（傍線部）について検討してみたい（諸写本の解釈を確認するため訓点に随って書き下した。また参考までに、現行の『日記故事』系統も【表1】に基づき示した）。なお本節の分析については、金文京氏との共同読解によって得られた知見が多く含まれ、同氏に多大なるご教示を賜っていることをここに記し、御礼申し上げます。

2 漢文帝…〔洪〕〔漢延〕〔廷〕の誤写〕賢母ニ事フマツルニ〕(①)

〔詩〕〔漢帝賢母ニ事フ〕(②)

〔嘉〕〔漢廷賢母ニ事フ〕(⑦⑧)

〔日〕〔漢庭事賢母〕（※以下、寛文三十九年和刻本『日記故事大全』による）

…洪武本・嘉靖本ともに「漢廷」〔漢延〕(①)は「漢廷」(A)の誤写)で、文帝が漢の朝廷で病気の母に仕えた、という意味である。しかし、『史記』爰盎伝、『漢書』卷四九「爰盎」によれば、漢文帝が母の看病をしたのは、「陛下居代時、太后嘗病三年」とあるように、文帝が「代王」、すなわち帝位につく前のこととなっている³⁷⁾。洪武本・嘉靖本の伝を確認すると、「前漢文帝、高祖之子、母薄太后。帝奉養無怠…乃為仁孝之賢君也」のように、看病する主語は「帝」になっているものの、後の「帝」と受け取れば、『史記』『漢書』と同じように病気の母への献身的な孝行をした後に天子となったと読めなくもない。『日記故事大全』の伝を見ると、「前漢文帝、名恒、高祖第三子、初封代王、生母薄太后、帝奉養無怠、母嘗病三年、帝目不交睫、衣不解帶…」のように、「初封代王」という一文が加わ

元・郭居敬撰『全相二十四孝詩選』系諸本の成立と展開について

り、代王時代のエピソードであることがより明白であるが、主語は「帝」を用いているのである。ここから推察するに、詩註本の「漢帝」②は、後に「帝」になったことを示す主語であった可能性もあろう。しかし一方で、『日記故事大全』の詩は、「漢庭事賢母」のように「廷」を引き継いだ形を採っており、伝の内容との齟齬が生じているのは不審である。

平仄の観点から鑑みると、「漢廷事賢母」は、「漢帝事賢母」に直すと一見一句の中では平仄が揃うようであるが、全体では平仄が整わないことになる。「事賢母」は「●○○●」が「○○●●」になるという規則を踏まえれば、二字目と四字目が「平仄」になり解決する。同様の規則の適用は、張孝張礼の「人皆有兄弟」にも確認される。したがって、本来は「廷」であったと考えるべきであり、後世の人がこの規則を知らずに「帝」に変更したものと推測される。あるいは、日本語の音通により「廷」を「帝」に変更したか。そうとすれば、『詩註』②の「帝」は日本での改変と考えられる。

4 曾參…洪 (詩) 「薪ヲ肩ニシテ歸ルコト未ダ晩カラズ」(①②)

(嘉) 「薪ヲ負テ歸リ來ルコト晩タル」(⑦)・「薪ヲ負テ歸リ來ルコト晩シ」(⑧)

(日) 「負薪歸未晩」

∴「肩」を動詞として用いるのは不自然であると判断され、「負」に改訂されたのであろう。『日記故事』では、「薪を負て帰ること未だ晩からず」となっている(三田本⑮も同じ)。また、「未」が嘉靖本で「來」に変化したとすれば、「母指纒方嚙、見心痛不禁(母が指を嚙むや否や、子の胸が痛んで耐えられなくなった)」の後に「未ダ晩カラ

ズ（遅くならないうちに帰った）」と続く部分の文脈が繋がりにくいために、「帰り来ルコト晚シ（帰ってくるのが待ち遠しい）」という母親側の心情に変更されたか。「来」では平仄が合わないので「未」が正しい。

6 老萊子…(洪)「喜色庭闈(二)満(ツ)」(①)

(詩)「喜氣庭闈ニ満ツ」(②)

(嘉)「喜色庭闈ニ満ツ」(⑦)(⑧)

(日)「喜色満庭闈」

…洪武本と嘉靖本は共に「喜色」であり、「戲舞學嬌癡、春風動綵衣、雙親開口笑、喜色満庭闈（春の風が吹いてきて、色とりどりの美しい着物が揺れている。二人の親が大きな口を開けて笑い、喜ばしい様子が親のいる部屋に満ちあふれている）」といった内容。「喜色」は嬉しそうな表情のことであるから、第三句の双親の朗らかに笑う様子を主とし、家族の笑顔の表情が視覚的に印象づけられる。後の『日記故事大全』（寛文三十九年和刻）も「喜色満庭闈」を採る。一方、詩註本(②)(⑥)は「喜氣」となっており、独自の本文を共有している点が注目される。杜甫「喜聞盜賊蕃寇脱退口号五首」に「今春喜氣満乾坤、南北東西拱至尊」とあるように、この「喜氣」は春の喜ばしい気が天地に充滿している状態であり、第二句の「春風」に呼応する。詩註本は、こうした詩を参照したか。なお「氣」「色」ともに仄声。

7 丁蘭…(洪) (詩)「形容在日ノ身」(①)(②)

元・郭居敬撰『全相二十四孝詩選』系諸本の成立と展開について

(嘉) 「形容日ニ新ナルニ在リ」(78)

(日) 「形容在日時」(※「時」は平仄合わず)

…洪武本・詩註本の五言絶句全体の意味としては、「刻木為父母、形容在日身、寄言諸子姪、聞早孝其親(木を刻んで亡き父母とした、その姿は在りし日の親の体のようであった、子供や甥たちに告げることには、早いうちに親に孝行しなさいと)」となるであろう。この洪武本系(①②)の「身」が、嘉靖本では「新」に変更されており、この場合は「(木を刻んで亡き父母としたが、)その姿は日に日に新しく見えた」(但し、そう解釈した場合、「在」の意味が不明瞭)の意となる。

洪武本系の伝の末文に「今人父母俱存者、可不敬乎(今人の父母俱に存する者は、敬せざるべけんや)」、すなわち「現在の人で父母がともに健在でいる者は、どうして親を敬わずにいられようか(今父母ともに健在でいるのであれば、どうして親を敬わずにいられるであろうか)」とあるのを参照すると、詩・伝ともに、木像に彫った父母ではなく、生きている親にこそ仕えるべきなのだという悔恨と戒めの言葉によって締められていることがわかる。すなわち、丁蘭は、両親を失った後に木像を親とみなして生きているがごとく仕えたのであるが、全体としては丁蘭の孝行は空疎なものである、という評価を下していることになる。

ところで、第四句「聞早孝其親」の「聞早」は唐宋代の詩や詞に見える表現で「早いうちに」³⁸⁾、すなわちここでは「親が生きているうちに」の意となる。後世にはこの意味が取り難くなったようで、明末の『日記故事』では、「刺木為父母、形容在日時、寄言諸子姪、各要孝親幃」のように第四句が大きく変更されており、四句末字「幃」に韻を合わせるため第二句も「時」となっている。

ここから推察するに、嘉靖本の変更も「聞早」が既に当初の意味で解説できなくなっており、「聞こえること早し」、すなわち「姪や甥が噂したので、）丁蘭の孝行が早くも評判になった」というように誤読したことにより、前半の木母に仕えた丁蘭の孝行を称賛する文脈で「その姿は日に日に新しく見えた」のように孝の奇瑞を強調する形に変更されたのではないか。このような事例において、洪武本・詩註本の五言絶句は唐宋代の詩や詞に通じる表現が見られる点は注目される。

9 黄香…(洪)「炎天ニ枕ヲ扇イテ涼ヲシム」(①)、「炎天ニ枕ヲ扇イテ涼ス」(②)

(嘉)「夏天ニハ枕ヲ扇テ涼ム」(⑦)・「夏天ニハ枕ヲ扇テ涼シウス」(⑧)

(日)「炎天扇枕涼」

…洪武本・詩註本は「冬月は衾ふすまを温めて煖し 炎天は枕を扇ぎ涼し(冬の季節には、寝具を自分の体温で暖め、暑い夏には枕を扇いで涼しくする)」となる。洪武本・詩註本の「炎天」は夏の焼け付くような天気を意味し、「夏天」と意味は変わらないが、第一句の「冬月」に対応させて嘉靖本では「夏天」と変更されたのであろう。既に指摘されているように「冬月温衾煖、炎天扇枕涼、兒童知子職、千古一黄香」の典拠は、宋・林同『孝詩』の「冬月温衾煖、炎天每扇牀、如何漢天下、只有一黄香」であり、これによって「炎天」を用いたのである。林同は郭居敬と同じ福建人であり、郭居敬は宋代の文芸の気風を継ぐところがあつたようである。林同「孝詩」には二十四孝に入る孝子が多数採られており、郭居敬が『詩選』を構想においても影響を受けていると考えられる。さらに郭居敬には『百香詩選』という本も刊行していたことが知られるが、本書ではすべての詩が「香」で終わっており、ここでも林同の詩が

参照されたことが指摘されている。⁴¹

10 董永…(洪) (詩) 「天妃陌上ニ迎フ」(①) 「天妃陌上ニテ迎ウ」(②)

(嘉) 「天妃陌上ニ迎フ」(⑦⑧)

(日) 「仙姫陌上逢」

∴「天妃」も「天姫」も織女を指すのは間違いない。但し、「天妃」では「天の妻」ということで、既に天帝の妻と
いうことなるが、董永と夫婦になるのであれば、「姫」すなわち天帝の娘のほうが良いと判断され変更されたのであ
ろう。

11 姜詩…(洪) 「舎側ニ甘泉出ツ」(①)

(詩) 「舎側甘泉ノ水」(②)

(嘉) 「舎側甘泉出(ツ)」(⑦⑧)

(日) 「舎側甘泉出」

∴洪武本及び嘉靖本は共に「舎側甘泉出」とする。「舎側に甘泉出づ、一朝双鯉魚あり、子能く母に事ふるを知り、
婦更に姑に孝あり(家の傍らに泉が湧き出し、ある朝二尾の鯉が現れた、子は母に仕えることをよく心得、妻はいっ
そう姑に孝行を尽くした)」といった内容。

一方で詩註本②は「舎側甘泉水」となっている。詩註本⑥は「金側甘泉水」となっているが、「金」を「舎」の誤

写と考えると②と同文となる。なお、「出」「水」ともに仄声。

12 蔡順…(洪) (詩) 「黒榭萱闈ニ奉ズ」(①) 「黒榭萱闈ニ奉(ズ)」(②)

(嘉) 「黒榭親闈ニ奉ズ」(⑦⑧)

(日) 「黒榭奉萱闈」

…洪武・詩註本の「萱闈」は萱堂と同じで母のことである。身延本①の頭注には「萱闈者此ノ人ハ不弁ナルニ依テ我カ母ヲチガヤノ家ニ置クヲ云也」とあり、財力がないために、母を「茅^{ちがや}」葺きの家に住まわせていたと解釈しているようである。一方で、嘉靖本では「親闈」として両親を指す言葉に変更されている。しかし伝を確認すると、嘉靖本においても「黒者奉母、赤者自食」となっており、孝の対象は「母」のままである。万暦刊『日記故事大全』でも「萱闈」のままになっているのであり、嘉靖本がなぜ「親闈」に変更したのかについては不明である。

(洪) 「牛米君ニ贈テ帰ル」(①)

(詩) 「給米君ニ贈テ皈ル」(②) 参考…「給米君ニ賜テ帰ル」(⑥)

(嘉) 「牛米君ニ贈テ帰ラシム」(⑦⑧)

(日) 「牛米贈君帰」

…国家図書館本(A)の「告米」の「告」は明らかに誤りである。伝には「米三斗牛蹄一隻」とあるので「牛」の誤刻とみてよいであろう。①は写す際に、伝に従って直したか。詩註本②⑥は「給米」と特殊な語を共有しており、両者が密接な関係にある写本であることが窺える。⑥の割注には、「蔵ヨリ分ケズシテ賜ルヲ廩給ト云イ分テ賜ヲ給米

ト云イ、口糧ト云ナリ、蔡順ハ廩給ヨリタマハルナリ」という詳細な説明がある。あるいは、日本語の音通で「牛米」を「給米」へ変更したのかもしれない（なお台湾本⁽¹⁴⁾及び三田本⁽¹⁵⁾も「給米」と作る）。嘉靖本系の平松文庫本では「牛」を「未」とするなど諸本で異なる多い部分である。

15 刺子…(洪) 「若シ高声ニ語ラズンバ」⁽¹⁾

(詩) 「敢テ高声ニ語ラズンバ」⁽²⁾ ※本来「敢テ高声ニ語ラズ」と読むべき⁽⁴⁾

(嘉) 「若シ高声ニ語ラズンバ」⁽⁷⁾ 「若シ高声ニ叫バズバ」⁽⁸⁾

(日) 「若不高声語」

…本話は、仏典に見えるジャータカとしての睺子譚を淵源に持ち、それらの多くは毒矢に当たって死んでから蘇生する展開を持つ。しかし、本詩では「高声」をあげて正体を告げなければ、山中で毒矢を追って（死体として）帰ったであろう（「若シ高声に語らざれば、山中に箭を帯びて歸らん」・「敢て高声に語らざれば、箭を帯びて歸らん」という仮定になっており、実際には「高声」を上げたことで死を免れた逆の展開となっている。これは『詩選』以前の諸本に見られず、本詩における改変と考えられるが、射られたものの蘇生したとする話は仏典の中でも特に『雜寶藏經』一・王子以肉濟父母縁⁽⁴⁾に見られ、「高声唱言」と似た表現も用いられている点で注目される。二十四孝で他に死者が蘇生する話はないために、『詩選』では、『雜寶藏經』に見えるような、射られたが死ななかつたという設定を参照し、さらに「高声」という表現から詩想を得て、話を変えたのではなかつただろうか。なお、『孝行録』では、国王の放った矢に中って死んだ後、天帝の薬によって蘇生する話となっている（「前略」中箭哀呼曰、「王今一箭殺三

道人」、王問其故、曰「我已死而兩親俱死矣」。父母聞之慟哭、王遂引至抱屍所、父母抱屍大哭、振動天宮、天帝吹藥入口、琰子得蘇」ソウル大学奎章閣藏・万曆二十八年重刊本)。

ちなみに「語」については、龍大本⑧のみ「叫」とする。確かに、この場面においては「語」より「叫」のほうがふさわしいが、「不敢高声語」という以下の李白の詩の表現を踏まえて詩としての面白さを狙ったと考えられる(「夜宿峰頂寺、舉手捫星辰。不敢高聲語、恐驚天上人。世間傳揚大年幼時詩非也」宋・胡仔撰『漁隱叢話』前集卷五「李謫仙」)。なお、興味深いことに、室町中期写『詩註』②では、「若不」ではなく、この宋代の詩と同じ「不敢」を用いており、本詩を参照して書き換えた可能性が高い。

以上、洪武刊本・詩註本から嘉靖刊本に向けて変更された部分について、その要因や性質を考察してきたが、その要因としては、少なくとも次の二点ほど指摘できそうである。

- 1、明らかな誤りを正した(4・12「牛」)、もしくは解釈上変更した(4・10・12「親」)
- 2、時代が下って当初の意味・意図が不明確になってしまった(2・7・9)

このうち、特に注目すべきは2のパターンであり、洪武本においては、郭居敬の宋代の詩句や文芸的潮流を引き継ぐ側面があり、それによって却って後世に意味が取りにくくなった面もあったのである。また「詩註本」②系統は、独自の解釈や唐宋代の詩を参照することによって詩句を大胆に変更する側面があったようである。問題は、この詩註本系が中国において存在したか、それとも日本での解釈によって派生した系統か、という点である。唐宋代の詩句の影響が顕著にみられる点は、古態を思わせなくもないが、一方で2漢文帝の「廷」を「帝」②に、また12蔡

順の「牛米」を「給米」に変更したのが日本語の音通に拠るとすれば、日本での改変の可能性が高いであろう。

以上、『詩選』には、その孝子の人選や郭居敬の人脈、土地柄、また郭居敬のもう一つの作品『百香詩選』の存在により、教訓的な意図のみならず、「題詠」のような文芸的な側面がある点は既に金氏によって指摘されていたところであるが、詩の表現内容上からもその妥当性が確認されたといえよう。さらに「洪武本」は「嘉靖本」よりも表現の上でより宋代の詩の流れを汲む文芸的な性質が強く見られ、それが次第にわかりやすい内容へ変更されていった経緯も伺えるのである。

一方で、本書の見返しに「二十四孝奉親詩選」とあるのは見逃せない。本書が、親への報恩など何らかの意図をもつて編まれた可能性も示唆するからである。両親の追善供養の場に二十四孝を用いるのは、中国において（特に北方においては）説話享受の大きな流れとしてあった。次に、『全相二十四孝詩選』の図像の問題について検討したいが、その淵源はやはり墓中に求められるのである。

七、『全相二十四孝詩選』の挿図の来歴——北宋以降の墓の「二十四孝図」を手掛かりとして

そこで本節では、『全相二十四孝詩選』の挿図の来歴について、墓中の図像を手掛かりとして考えてみたい。

既に、拙著第三章に分析したように⁴⁵、二十四孝図の成立は少なくとも北宋時代の墓域の装飾にまで遡ることができ。そもそも墓域に孝子図像をもって装飾するのは、古い淵源を持つのであり、中でも山東省嘉祥県の武梁氏祠堂画像石（後漢）の中に孝子伝図が十七体も含まれていることは有名である。さらに六朝時代には流麗な線刻による孝子伝図が、石棺や囲屏床に施された事例が多く発見されている。拙著において⁴⁶、これら古くから図像化されてきた孝子

(大舜、丁蘭、閔損、曾參、老萊子、董永、元覚の七孝子) についてその描かれる場面と構図について調査をした結果、遼・北宋以降は、描かれる場面が固定化され、その構図も、人物の配置や動作、そして人物を特定するアトリビュート(大舜の象や鳥、曾參の柴など) が定型化することが明らかになった。さらに遼、北宋代以降から頻出してくる孟宗、王祥、田真、そして『孝行録』系統の孝子(伯兪、曹娥、劉明達、鮑山など) についても同様のことが確認できた。

また、いくつかの場面が異時同図や略伝図のような様式で描かれていたものが、遼北宋以降は、一説話につき一場面しか描かれず、物語的情景を表現するよりも、その説話の最も象徴的な場面の図像とともに孝子が認識されていた状況が明らかになった。例えば、大舜は歴山で象と鳥が耕作を助ける場面、董永は織女との別れの場面というように、漢・六朝時代では前半の親と関係していた場面について描かれていたものが、感応の場面に焦点化していくのである。これは講経僧の語りや演劇的享受、また詩と共に享受されていく唐代から五代へと向かう過程に何らかの形で呼応するものであったかもしれない。仏教の講経僧による絵解きの場面では、象徴的感動的な場面について詩として歌われたと推測され、また遼・北宋以降の孝子説話の図像が、一見して元末以降の二十四孝版本の図像と類似しており、その版本は常に図像と漢詩が中心的な構成となっていた状況があるからである。

したがって、孝子説話の本文の歴史が孝子伝から二十四孝へと移行するのと重なるように、図像についても、孝子伝図から二十四孝図へと移行したといえる。すなわち、遼・北宋以降の墓にみられる二十四に満たない孝子説話の図像も、スペースの問題などで二十四揃っていないだけで、二十四で一組という認識の上に描かれていた図像と推測されるのである。

さて、北宋・遼以降の墓から発掘される二十四孝図の二十四人の顔ぶれは、『詩選』とは少し異なっており、『詩選』よりも高麗版『孝行録』と一致を見ることが指摘されている⁴⁸。したがって、『詩選』に先立って『孝行録』系統の二十四孝が成立しており、特に中国北方で流布していたことは疑いない。金文京氏は、『孝行録』の制作に関わった権溥・権準父子および李斉賢は高麗末期の有力な文人政治家であり、元にたびたび赴き、元の一流学者・文人との交流も盛んであったことから、当時、元で流行していた二十四孝を持ち帰って高麗で刊行したと推測されている⁴⁹。元において二十四孝は雑劇にも取り込まれ、民間に流布していたと同時に、元末明初には張憲「題王克孝二十四孝図」(『玉筍集』巻五⁵⁰)、謝應芳(一二九五—一三九二年)『二十四孝讚序』(『龜巢稿』巻一四⁵¹)など時の文人も関心を寄せたものであった。こうした画賛という形態での享受がなされていたことが、権溥・権準また李斉賢らの『孝行録』編纂の動機にもなったのであろう。なぜなら、先述のように、『孝行録』はもともと画に対する賛として制作されたからである。韓半島では、その後も『朝鮮太宗実録』巻二六(一三年(一四一三年)癸巳二月三十日乙亥)に「書筵官作屏風。抄畫孝行録、仍書李斉賢贊及權近註於其上。既成、世子使大君解之。曲盡其意」と見え、朝鮮初期、改めて『孝行録』からいくつかの孝子を写し屏風に仕立てられて、そこに李斉賢の賛と権近の注を施し、大君すなわち王子に解説させたことが知られる⁵²。残念ながら、『孝行録』の挿図を含む刊本も写本も現存が確認されていないが、この時点では『孝行録』には絵があったのである。北宋以降の墓中の二十四孝図と『孝行録』の挿図を比較することは不可能であるが、おそらく元で流布していた墓中に見える二十四孝図と同様の図像を、画賛のような形で李斉賢等が持ち帰ったものであろう⁵³。

一方で、『詩選』の撰者である元の福建の文人・郭居敬は、同じ福建の朱熹の人脈とも通じる側面があり、民間で

流行した「二十四孝」を基に、朱子学的・文芸的な基準にあわせて人選を変更したことが指摘されている。⁽⁵⁵⁾『詩選』には北宋の朱寿昌と黄山谷（庭堅）という郭居敬に時代的に近い人物が選出されており、特に黃庭堅は著名な詩人であることから、その変更の意図が窺えるのである。では、その挿図はどのような流れが想定されるであろうか。

洪武年間刊『全相二十四孝詩選』の挿図と墓中の「二十四孝図」との比較

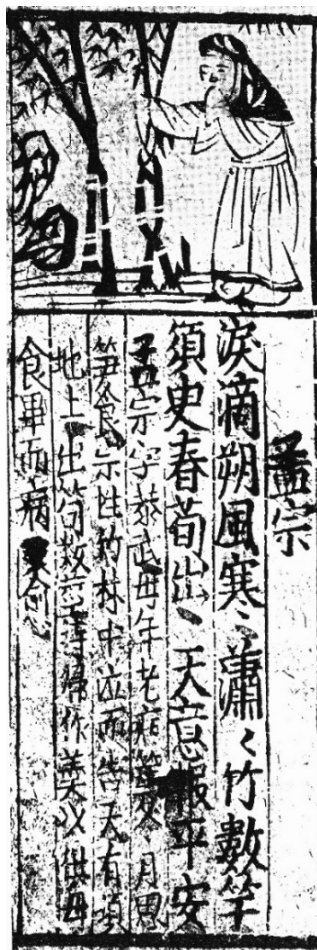
そこで次に、中国国家図書館蔵『全相二十四孝詩選』の挿図について、墓中から発掘された孝子図像と比較し、その来歴を探ってみることにしよう。

先述のように、基本的には、遼・北宋以降の墓において孝子の物語の中で描かれる場面が固定し、さらに主要人物の動作や小道具も定型化し踏襲されていくのであるが、それらは基本的には『詩選』の挿図においても共有されているものが多い。その中で、人物の仕草や配置において少しずつ差異が見られるが、特に『詩選』と一致するものを確認する作業をしてみたい。

例えば、孟宗図について、北宋代の墳墓から発掘された図像を確認すると、既に竹林で泣く孟宗が描かれ、『詩選』との類似が確認でき、⁽⁵⁶⁾それ以後の金元墓においても、多少の動作や向きにおける変化はあるが、孟宗と竹のモチーフ、孟宗が片方の袖を顔に持って行く動作という基本的な構図が踏襲されている。但し、より細かく見るならば、墓の図像では、孟宗はほぼ座って泣くパターンであるが、『詩選』では立っているという違いがある【図3】。このように孟宗が立っている構図を持つものとしては、山東省の「済南市柴油機廠元代磚雕壁画墓」（『文物』一九九二年第二期）が挙げられる【図4】⁽⁵⁷⁾。



【図4】「済南市柴油機廠元代磚雕壁画墓」孟宗



【図3】中国国家図書館蔵『全相二十四孝詩選』孟宗〔橋本 一九九五・一〕

他にも、金元墓と『詩選』と構図が一致するものがある。例えば、閔損図において、「山西長子隰石哲金代壁画墓」（『文物』一九九〇年第五期）は、画面左側に描かれた父、画面右側の継母、その間に閔損が描かれ、人物の位置関係と向き、さらに継母が振り向く動作、後ろの家の描写が類似している【図5、6】。これは金代の図像であり、元・郭居敬の『詩選』に先行することは間違いない。

他の孝子図についても、『詩選』と比較的近い構図を墓中の孝子図から見いだすことができる。試みに、拙著の基礎資料編Ⅲに所収した墓中の孝子図（a～β）から国家図書館本『詩選』と最



【図6】中国国家図書館蔵『全相二十四孝詩選』関損
〔橋本 一九九五・一〕



【図5】「山西長子県石哲金代壁画墓」関損

も近い図像を選出すると、左のようになる。

- 大舜↓β／漢文帝↓なし／丁蘭↓r／孟宗↓β／関損↓v／曾
 参↓y／王祥↓ks／老萊↓a1／姜詩↓(oが近いか)／唐
 夫人↓該当なし／楊香↓該当なし／董永↓(o…家先での別
 れ)／黄香↓なし／(王衷・郭巨・朱寿昌・黄山谷は挿図が
 欠)／劊子↓s／蔡順↓(w…桑の実を入れる甕)／庾黔婁↓
 なし／呉猛↓なし／張孝張礼(趙孝宗として) ↓w／陸績↓
 (wが近いか)

a…後漢「武氏祠画像石」「中国画像石全集」一(山東出版社、二〇

〇〇年、図四九（六六）

k…遼「遼寧鞍山市汪家峪遼画像石墓」（『考古』一九八一年第三期）

o…北宋「河南洛寧北宋樂重進画像石棺」（『文物』一九九三年第五期） …二例

r…金「河南焦作金墓」（『文物』一九七九年第八期）

s…金「山西聞喜寺底金墓」（『文物』一九八八年第七期） …二例

v…金「山西長子県石哲金代壁画墓」（『文物』一九八五年第六期）

w…金「山西長治安昌金墓」（『文物』一九九〇年第五期） …三例

y…南宋「広元南宋雜劇石刻墓」（『文物』一九八六年第二期）

β…元墓「済南市柴油機廠元代磚雕壁画墓」（『文物』一九九二年第二期） …二例

このように、『詩選』と近い図像を持つ墓を確認したところ、その三分の二が金・元墓に見いだせることが判明した（一五例のうち十例、なお例外的に、老萊子のみは、なぜか漢墓に近い図像を持つ）。とりわけ、先の孟宗図・閔損図のような刊本と金・元墓の孝子図の一致は、両者の間に何らかの關係性を想定させる看過し難い現象である。

しかし『詩選』は福建で刊行されたものであるから、こうした版本の挿図と中国の特に華北における金・元墓の孝子の図像が類似しているからといって両者に直接的な影響關係があったとは言い難い。ここで自ずと北方の墓の図像と南方の刊本の挿図に類似性がみられるのはなぜかという問題が浮上してくるのであるが、この謎を解く鍵は、次節の資料にある。

八、山西長治市魏村金墓「畫相二十四孝銘」（天德三年（一一五一年））

最近、『考古』（二〇〇九年第一期）に報告された「山西長治市魏村金代紀年彩繪磚雕墓」に残る「畫相二十四孝銘」に着目し、これが『孝行録』系統の二十四孝の書物の存在が北宋まで遡る可能性を示唆する資料であると指摘したのは金文京氏である。氏は、この金墓に見える二十四孝が『孝行録』の成員と一致することのみならず、墓の壁に墨書された各話の伝について『孝行録』の伝と比較し、本文にも関連性が認められることを指摘した。さらに、その造墓年が北宋滅亡から間もない金・天德三年（一一五一年）であることから、『孝行録』系統の「畫相二十四孝銘」と題された書物が、北宋には存在していたという重要な見解を示された。そして、その書名からは、図・文のみならず「銘」すなわち賛を具えていたことが窺えるという。

今試みに、両者を「伯瑜」で比較してみよう。

●金墓「畫相二十四孝銘」（一一五一年）韓伯瑜

韓伯瑜奉母、母常以杖訓之、瑜亦請杖之。一日母訓、瑜動泣。母曰：「□常訓、汝則□、今何泣？」瑜曰：「昔訓見痛、今不痛、知母老。」母□□□。

●高麗版『孝行録』（一三四六年）伯瑜泣杖

伯瑜至孝。時有過、母杖之而泣。母曰、「他日未嘗泣、今何泣也？」。瑜對曰、「往者得杖常痛、知母康健。今杖不

元・郭居敬撰『全相二十四孝詩選』系諸本の成立と展開について

痛、知母衰、是以泣耳」。

両者を見比べると、金墓は二十四孝の成員のみならず、その本文においても『孝行録』生成の系譜を遡るものであることが明らかであろう。このことは、北宋に既に『孝行録』系統の二十四孝の図・賛・伝を持つ書物が既に存在したことを示すのみならず、北宋・遼・金の墳墓の二十四孝図と書物形態の二十四孝に共通性が認められる現象の具体的な背景を示す点でも極めて重要である。つまり、当時工匠たちは、こうした二十四孝の書物の挿図を直接、或いは間接的に参照していた可能性が高いのであり、そうした書物の形で、元代に郭居敬のいた南方建安の地に齎されたことが推測されるのである。⁶⁰⁾

前節において、南方の福建で生まれた『詩選』の挿図の中に、北方の金・元墓の壁画と一致するものが見られるのはなぜか、という疑問が生じたわけだが、この地域的な隔たりを超える現象について、宋・金代の二十四孝の書物が媒介したとすれば説明が付くのであり、元の『詩選』の図・詩・伝の構成もその淵源を北宋まで遡るが可能となるのである。さらに、親の墓に『晝相二十四孝銘』という書を写し取る、ということが行われていたとすれば、書物になった「二十四孝」においても、口承の「二十四孝」における追善供養の重要な機能が継承されていたことを示すのであり、『詩選』の表紙にあった「奉親」という言葉にも一層の重みが出てくるのではないか。

九、『全相二十四孝詩選』の図・詩・伝の形式の系譜

さらに元代の二十四孝図について現在窺い知ることができるとしては、トルコのトップカプ宮殿美術館に残され



【図7】「舜倫之道」トプカブ宮殿美術館蔵

る元の「舜倫之道」図（版画）一幅が注目される【図7】⁽⁶¹⁾。「二十四孝」と銘打ってはいないが、劉政、董永、王祥、田真、伯瑜、徐文の六孝子の図・文・賛がそろっている点は貴重である。董永、王祥、伯瑜は『孝行録』系二十四孝の孝子であるが、劉政と徐文は珍しいものである。しかしその図像は二十四孝図の一部と考えてよいものである。或いはもう三幅が存在し、二十四孝の一部であったかもしれない。

試みに、墓の図像と比較すると、董永↓（o…家先での別れ、振り返る織女と地面から噴き出す雲気、s…董永が拱手する仕草）、王祥↓（v…王祥の足の組み方）、田真↓（s…樹木の周りで、泣く人物の袖の形）、伯瑜↓（o…母と伯瑜の対面する向き、伯瑜の拱手する仕草、但し伯瑜は立っている）、徐文（元覚として）↓（u「山西長治市

故漳金代紀念墓」⁽⁶²⁾…山の上の祖父、麓の父子の位置関係）のように、概ね金墓の山西周辺から出土した図に近いことがわかる（o s vの墓の詳細は、第七節を参照）。

賛・伝については、『孝行録』と伝・賛ともに近い内容が確認される（但し、手持ちの図像が不鮮明のため、全文は判読できなかった）。先と同じ「伯瑜」を引いてみよう。

●元「舜倫之道」図（一二七一〜一三六八？年）

(トプカプ宮殿美術館蔵)

伯俞(至孝)母/杖之□下母/曰□杖□□/□今何泣下/對曰往□□/□今杖□知/母力衰□泣

贊曰伯俞受杖/前莫□(袂)/以杖之□/知母不衰

●高麗版『孝行録』(二三四六) 伯瑜泣杖

伯瑜至孝。時有過、母杖之而泣。母曰、「他日未嘗泣、今何泣也?」。瑜對曰、「往者得杖常痛、知母康健。今杖不痛、知母衰、是以泣耳」。

伯瑜者何、汝南韓氏。事母母嚴、杖已已喜。後復杖之、悲泣不已。母詰其故、哀哀致辭。昔杖而痛、知母不衰。今而不痛、兒寧不悲。

以上のような伝・贊における共通性から、『孝行録』系統の当時北方で流行していた二十四孝と関わるものであることが確認される。このような凶・伝・贊が揃ったものを高麗の知識人が持ち帰って企画制作したのが『孝行録』だったのである。

十、結びにかえて——『全相二十四孝詩選』による「二十四孝」の刷新

本稿では、これまで説話配列順に関する系統研究が中心であり、その内容や表現にまで分析が及ぶことが殆どなかった『全相二十四孝詩選』について、特にその五言絶句を中心に、現存最古の明初(洪武年間)刊本である中国国

図書館蔵本を日本に伝存する諸写本との比較検討を行った。その結果、国家図書館蔵『全相二十四孝詩選』と嘉靖二十五年刊『新刊全相二十四孝詩選』とは、その説話配列順序の違いのみならず、五言絶句や伝においても特徴的な差異が存在する点が多くなった。さらに、日本伝存の写本の中に、明初刊『全相二十四孝詩選』に近いが、独自の内容を含む『全相二十四孝詩註』の系統があり、唐宋詩の表現に近く、『詩選』の古態を残す可能性もないとは言い切れないが、おそらく日本で派生した系統であることを指摘した。

その上で、明初刊『全相二十四孝詩選』から嘉靖二十五年刊『新刊全相二十四孝詩選』に向けて改訂されていた箇所に着目し、改訂が施された要因・意図について考察した。その結果、元・郭居敬の宋代以来の文芸的な流れを受け継ぐ詩作態度が浮かび上がってきたと同時に、そうした側面が、後世に理解されにくくなるとともに、より分かりやすい内容へと変更されていった経緯が明らかになった。また、江戸時代の二十四孝受容の土台を成すお伽草子（嵯峨本）を生み出したのは、嘉靖本の享受の流れであったことも指摘した。

一方で、挿図成立の経緯については、国家図書館蔵本の挿図を対象に、墓域から発掘される「二十四孝図」との比較を行い、特に山西・河南周辺の金元墓に共通の図柄を見出せることを指摘し、その理由として図・伝・賛を有する『孝行録』系統の二十四孝の書物が北方から南方に齎された経緯を想定した。つまり、郭居敬は、『孝行録』系統の二十四孝の書物を参考に、より文芸的な態度で五言絶句を作り、編み直したものと推測されるのである。

最新の研究では、「二十四孝」は北宋頃には既に図・伝・賛を具えた書物として成立していた可能性が示唆されており、その系統を継ぐ形で、北方では『孝行録』が成立していたといえる。

では、郭居敬の『詩選』の新しさとは何だったのであろうか。その一つは、北方で流行していた二十四孝の所収説

話を文人的な好みにあうように調整し、それまで「二十四孝」には賛を付すのが通例であったのに対し、宋・林同の「孝詩」などを参考にして、絶句と伝（物語）の組み合わせにした点にあったのではないだろうか。おそらく、口承文芸の流れを汲む二十四孝に対し、題詠的文芸的な風を装った点が新鮮で、朱子学の気風の残る建安で歓迎されたのではないかと考えられる。

しかし一方で、国家図書館本『詩選』の表紙に「全相二十四孝奉親詩選」と刻まれているように、その編纂の契機の一つとしては、やはり親への追善供養の意図があったのではないかと想像される。つまり、書承の文人文化の文脈においても、孝子故事の死者供養の機能が継続されていたと考えられるのである。

また、このような図・詩・伝を持つ形式の系譜を辿ると、古くは六朝時代の編纂とも目される陽明本孝子伝⁶⁴、敦煌本孝子伝、金墓「晝相二十四孝銘」、トプカプ宮殿美術館蔵「彝倫之道」、『孝行録』、林同「孝詩」（図はない）が挙げられるが、このうち、賛（四句）ではなく絶句を持つものは、敦煌本孝子伝⁶⁵、宋・林同「孝詩」の二つしかない。とりわけ林同「孝詩」については、郭居敬が直接参照したことが既に指摘されており、今後、郭居敬のもう一つの『百香詩選』の詩作も含めて『詩選』の性格がさらに追究されるべきであろう。

【主要参考文献】

- 徳田進 一九六三『孝子説話集の研究——二十四孝を中心に（中世編）』第三章第一（井上書房）
- 川瀬一馬 一九四一・一二「二十四孝詩註に就いて」（『書誌学』一七）。
- 母利司朗 一九九一・九「『全相二十四孝詩選』考——日本近世における『二十四孝』享受史の諸問題——」（『東海近世』第四号）。
- 金文京 一九八九「『孝行録』の明達売子について——『二十四孝』の問題点（『汲古』一五）

- 一九九四「『孝行録』と『二十四孝』再論」(『藝文研究』六五)。
- 二〇〇二・三「日本龍谷大学所蔵元朝郭居敬撰『百香詩選』等四種百詠詩簡考」(張宝三、楊儒賓編『日本漢学研究初探』台北、財団法人喜瑪拉雅研究發展基金會)(日訳・金文京「龍谷大学所蔵、元・郭居敬撰『百香詩選』等四種百詠詩について」『日本漢学研究初探』二〇〇二年一〇月、勉誠出版)。
- 二〇〇七「高麗の文人官僚李齊賢の元朝における活動——その峨眉山行を中心に」(夫馬進編『中国東アジア外交交流史の研究』京都大学出版社)。
- 二〇一九「略論『二十四孝』演変及其対東亞之伝播」(『中国文化研究』、北京語言大学)
- 橋本草子 一九九五・一「『全相二十四孝詩選』と郭居敬」(『人文論叢』四三)。
- 一九九八「日記故事」の版本について——二十四孝図研究ノートその三」(『人文論叢』四六)。
- 二〇〇七・一「『全相二十四孝詩選』と郭居敬(承前)——二十四孝図研究ノートその四」(『人文論叢』五五)。
- 二〇〇八・一「慶応義塾大学斯道文庫蔵写本『廿四孝詩』について」(『人文論叢』五六)。
- 二〇〇八・一「日本に於ける『全相二十四孝詩選』の受容」(『集刊東洋学』一〇〇)
- 寺田(宇野)瑞木 二〇〇四・一「江戸初期の二十四孝図——嵯峨本『二十四孝』と渋川版『御伽文庫』二十四孝」における図像の成立関係」(『浮世絵芸術』一四七)。
- 宇野瑞木 二〇一六「孝の風景——説話表象文化論序説」(勉誠出版)。
- 二〇一七「近世初期までの社寺建築空間における二十四孝図の展開——土佐神社本殿裏股の彫刻を中心に」(小峯和明監修・出口久徳編『日本文学の展望を拓く2 絵画・イメージの回廊』笠間書院)
- 梁音 二〇〇五「台湾国立故宮博物院蔵『全相二十四孝詩選』について——翻刻と解題——」(『名古屋短期大学紀要』四三)。

元・郭居敬撰『全相二十四孝詩選』系諸本の成立と展開について

(1) 王重民編『敦煌變文集』卷七（人民文学出版社、一九五七年）。

(2) 『徳田進 一九六三』第三章第一、及び『母利司朗 一九九二』参照。但し、嚴密には日本にもたらされた二十四孝も、三系統に収まるものではなかった。慶應義塾大学斯道文庫蔵の『二十四孝詩』内「二十四孝伝」には、盛彦・范純仁・荻仁傑・梁彦光・解以謙・淳于公・陳淑達・樂正子春という三系統に採られない孝子が含まれており、四孝文庫蔵の『信春筆二十四孝絵巻』や関西大学図書館蔵『二十四孝手鑑』にも令伯が採られているが、いずれも多くの類書に登場する有名な人物である。また中国において、孝歌（葬送歌）など口承の世界では、釈迦・目連・観音なども含む多様な二十四孝が存在することが指摘されている（前川亨「身体感覚としての孝——二十四孝と宝巻にみる孝の実践形態」（土屋昌明編『東アジア社会における儒教の変容』専修大学出版局、二〇〇七年）。五代宋初頃の敦煌本「故円鑑大師二十四孝押座文」にも二十四人は不明であるが、目連・釈迦・舜・王祥・慈烏・鴻雁・郭巨・老萊・孟宗などが確認できる。

(3) 『孝行録』所収の二十四話は左の通り（傍線は、『詩選』にない説話であることを示す）

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 1 大舜象耕 | 2 老萊兒戲 | 3 郭巨埋子 | 4 董氏賃身 | 5 閔子忍寒 | 6 曾氏覺痛 | 7 孟宗冬筍 | 8 劉殷天芹 | 9 王祥水魚 | 10 姜詩泉鯉 | 11 蔡順分棗 | 12 陸績懷橘 | 13 義婦割股 | 14 孝娥抱屍 | 15 丁蘭刻母 | 16 明達賣子 | 17 元覺警父 | 18 田真論弟 | 19 魯姑抱長 | 20 趙宗替瘦 | 21 鮑山負筐 | 22 伯瑜泣杖 | 23 琰子入鹿 | 24 楊香跨虎 |
|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|

(4) 『全相二十四孝詩選』では、『孝行録』所収二十四孝子（注1）のうち、劉殷天芹、義婦割股、孝娥抱屍、明達賣子、元覺警父、魯姑抱長、鮑山負筐、伯瑜泣杖が無く、代わりに漢文帝、黃香、唐夫人、呉猛、庾黔婁、王裒、黃山谷、朱寿昌が選ばれている。

(5) 明刊『日記故事』諸本所収「二十四孝」は、以下のように、『詩選』の「田真」と「張孝張礼」の代わりに、「仲由」と「江革」が入っている。

- | | | | | | | | | | | | | |
|------|-------|------|------|----------|------|------|------|------|--------|-------|-------|-------|
| 1 虞舜 | 2 漢文帝 | 3 曾參 | 4 閔損 | 5 仲由（子路） | 6 董永 | 7 劔子 | 8 江革 | 9 陸績 | 10 唐夫人 | 11 呉猛 | 12 王祥 | 13 郭巨 |
|------|-------|------|------|----------|------|------|------|------|--------|-------|-------|-------|

14 楊香 15 朱寿昌 16 庾黔婁 17 老萊子 18 蔡順 19 黃香 20 姜詩 21 王裒 22 丁蘭 23 孟宗 24 黃庭堅

(6) 日本では、『孝行録』所収の「明達亮児」を詠んだ通恕の詩が応永十九年から斯道文庫蔵「二十四孝詩」の制作下限の応永二十二年（二四一五年）までの間に作られていることから、その頃までには『孝行録』が伝来していたとされる〔橋本草子 二〇〇八・一一〕。

(7) 所収説話については、注4を参照。

(8) 〔橋本 一九九八〕。

(9) 拙論にて、元龜二年（二五七〇）竣工の土佐神社本殿幕股に彫られた「二十四孝図」の下絵に、明刊本『日記故事』系統の挿図が参照された可能性が高いことを指摘した〔宇野瑞木 二〇一七〕。但し、それが独立刊本の姿であったか、『日記故事』に付属する形であったかについては不明である。

(10) 〔母利 一九九一・九〕。

(11) 〔橋本 一九九五・一〕。

(12) 〔寺田 二〇〇四・一〕。

(13) 〔橋本 二〇〇七・一〕。

(14) 室町末から江戸初期にかけての二十四孝諸写本については、〔母利 一九九一・九〕、〔橋本 二〇〇八・一一〕、柳田征司「静嘉堂文庫蔵『二十四孝詩註』について」（山内洋一郎他編『近代語の成立と展開』和泉書院、一九九三年）など参照。

(15) 〔橋本 二〇〇八・一一〕。

(16) 禿氏祐祥氏によって複製紹介有り（全国書房、一九四六年）。

(17) 〔橋本 二〇〇八・一一〕。但し、説話所収順に若干の違いがある。斯道文庫本と平松文庫蔵本では二十四話の内「黄山谷」が十番目に有るが、龍大本ではなぜか後ろから二番目に移されている。書写過程で、黄山谷を飛ばしてしまい、後方に加えたも

元・郭居敬撰『全相二十四孝詩選』系諸本の成立と展開について

のか。

(18) 「橋本 二〇〇八・一」。橋本氏によれば、「斯道文庫本は国家図書館本より後に新たに版を起こしたものである」、国家図書館本は龍大本の絵入り本は原刊本の絵を日本風に書き換えたものである。また龍大絵入本に「或本無黄山谷有伯愈」として伯愈も最後に補足されており、黄山谷の代わりに、伯愈を採るものもあったことが知られる。

(19) なお龍大二種の末尾には二十四話の後に「伯愈」が加えられており、乙本に「或本無黄山谷有伯愈」と記されている。

(20) 黒田彰『孝子伝の研究』（思文閣出版、二〇〇一年）I 二一「二十四孝の成立——全相二十四孝詩選と日記故事——」。

(21) 「川瀬一馬 一九四一・一二」。

(22) 「橋本 二〇〇八・一一」。

(23) 『新鍔類解官様日記故事大全』（寛文九年和刻）七巻のうち一巻が「二十四孝」に当たる。（長沢規古矩也『和刻本類書集成』

三（汲古書院、一九七七）に所収）。なお、東京大学東洋文化研究所蔵『忠信堂四刻分類註釋合像初穎日記故事』（四巻の内一巻が「二十四孝」とほぼ同内容）。

(24) なお、詩註本②の五言絶句と同じ系統を持つ写本に、静嘉堂文庫蔵写本『二十四孝詩註』があるが、説話所収順が全く異なり、文は仮名交じり文である。⑥「二十四孝詩註」（静嘉堂文庫蔵）の天正十四年写の一本（「逆耳集」「金句集」と合写）も五言詩の特徴が第一、二グループと一致するが、配列はさらに全く異なるものとなっている。その配列順は下記の通り。1 大舜 2 董永 3 丁蘭 4 閔損 5 劓子 6 孟宗 7 朱寿昌 8 田真 9 郭巨 10 老萊 11 呉猛 12 曾參 13 漢文帝 14 王裒 15 楊香 16 庾黔婁 17 張孝張礼 18 黄香 19 黄山谷 20 陸績 21 唐夫人 22 王祥 23 姜詩 24 蔡順。

(25) 成實堂本(③)は、五言詩において基本的に国家図書館本(洪武本)系統で、かつ詩註本(②)の独自本文も一部共有するので詩註系といえるが、部分的に嘉靖本系統(⑦)も参照した形跡がある。

(26) 未見であるが、「橋本 二〇〇八・一一」によれば「⑥の内容を旅先で記憶に基づき書いたもの」という。

(27) 梁音氏の調査に拠れば、五言詩については『全相二十四孝詩選』系の五言詩注本と一致する部分が多いが、本文については、『全相二十四孝詩選』資料の他、『小学日記』、『小学』、『蒙求』の古注釈書、『金壁故事』、万曆三十九年版『日記故事』など、既に指摘されている資料以外の資料とも一致する部分があり、注意を要する」とする〔梁音 二〇〇五〕。

(28) 三田本(15)は、基本的に洪武本系で、一部詩註本(2)に特徴的な詩句〔漢帝〕〔繼母人間在〕〔給米〕などを含む。さらに嘉靖本系(7)を参照した形跡も伺え〔日新〕〔天姬〕など、言わば、三種の混在形である。

(29) 福岡市博物館蔵「二十四孝図屏風」には策彦周良、仁如集堯、惟高妙安、春沢永恩の四名の五山僧が賛を寄せている。本屏風制作の経緯については、中本大「永祿九年」の二つの「二十四孝」賛——初期狩野派「二十四孝図屏風」賛を中心に、『鏤氷集』の世界I(『語文』(大阪大学)六八、一九九七年)参照。

(30) 策彦が二度の入明に際し、仏典・儒書などを持ち帰ったことは『策彦和尚初渡記』、『策彦和尚再渡記』に見える。また策彦の入明については、牧田諦亮『策彦入明記の研究』上下(上・上・仏教文化研究所、一九五五年、下・法蔵館、一九五九年)に詳しい。

(31) (川瀬 一九四一・一二)。

(32) 徳田進氏の調査によれば、後期五山(永享以後百年)の二十四孝詩(統群書類従釈家部、文筆部、大日本仏教全書所収翰林五鳳集による)は、総数八十一題詠で、その作者は十五人、作例の多い順に並べると、策彦(28詠)、仁如(14詠)、周麟(8)、永恩(8)、寿桂(4)、集九・竜統・梅屋(3)、法孫・万英・永謹(2)、琴叔・俊承・通恕・如心(1)となるという。策彦をはじめ仁如・周麟・永恩の四名が特に二十四孝に関心をもっていたことは明らかであろう(徳田 一九六三)本論後篇第二章「五山における二十四孝の渡来と撰取」。また、例えば、京都大学附属図書館平松文庫蔵『二十四孝傳並賛』には、策彦、仁如ら三名の五山僧による二十四孝の七言詩が「三好日向守請」として書き留められており、三好長逸の注文に応じて賛を寄せている。三好長逸は一五五〇年ごろから一五六四年まで畿内に勢力を持った三好長慶の一族で、策彦とは長慶同様、連歌の友であったようである(長江正一『三好長慶』吉川弘文館、一九九四年)。連歌・和漢聯句仲間であった聖護院門跡の求めに応じて二十四

孝凶への着贅をしたのも永祿九年であり、当時このような連歌繋がりの人脈において二十四孝の享受が広がっていることが窺える。二十四孝の抄本が多く作られる時期が室町末期の元龜・天正期以降であることと重なり、この時期に五山僧周辺の公家や武家に広まっていたことが窺える。

(33) 「詔賜金海乘涼詩有序」嘉靖辛丑（一五四一年）六月二十六日、勲輔四臣同嵩供事西苑直宿。

「恭紀恩賜詩」…嵩荷蒙聖眷便殿召對西苑宿直偕勲輔五臣其果茗酒、饌天厨日給金幣器物尚方。珍賜不可勝紀問紀數事得近體詩二十九首。「賜畫面扇二十四孝人物」…宮扇新裁素楮清。丹青仍肖古人形。揮仁要濂賈中暑、勸孝還同座右銘。

(34) 『策彥和尚再渡集』上、嘉靖二十七年（一五四八年）九月廿日条「晴。齋罷。謁豐解元。（中略）謹奉獻履薄贅。小画参方等楊写・両面金扇壹柄・隻面金扇壹柄 元信写・濃紙八十張・小刀子一カ 計。又以両金扇一柄。贈豊大人令子。（後略）」（牧田諦亮『策彥人明記の研究』上、所収）。

(35) 「徳田 一九六三」は『詩選』が、南北朝期には既に渡来していたと指摘したが、「橋本 二〇〇七・一一」は、『孝行録』よりは遅れて渡来したであろうが、具体的な渡来の時期は特定できないとする。

(36) 身延本は「有」に作るが「存」の誤写であろう（もとの国家図書館本は意味の上で「存」であったと考えられる）。また詩註本②の「有」も誤写であろう。

(37) 『史記』卷一〇一「盜曰、陛下居代時、太后嘗病三年。陛下不交睫、不解衣。湯藥非陛下口所嘗弗進。夫曾參以布衣猶難之。今陛下親以王者脩之、過曾參孝遠矣」。

(38) 張相「詩詞曲語辭匯釈」（台湾中華書局、民国五九年）五五八頁に「聞猶趁也、乗也。聞早猶云趁早或趕早」と有り、南宋末期の劉克莊の詩「和竹溪披字韻詩…俚辭聞早安排了、未必他人識牧之」など、いずれも南宋以後の用例が示されている。

(39) 「金 二〇〇二」。

(40) 葉濤氏は、『詩選』に影響を与えた書物として、宋代の林同の『孝詩』を挙げる。この書は、宋理宗淳祐年間（一二四一—一

二五二年)の作で、歴代の孝子に対し、全て五絶詩を付している。孝子の内訳は、聖人の孝が十首、賢者の孝が二百四十首、仏の孝が十首、異域の孝が十首、物類の孝が十首であるという。歴代の孝子に五絶詩を付す形式は、二十四孝詩選へ影響を与え、たに違いなく、また『詩選』に選ばれる孝子が、林同の『孝詩』にも多く見られるという(大舜、曾參、閔損、老萊子、郭巨、姜詩、蔡順、丁蘭、陸績、黄香、王裒、王祥、孟宗、庾黔婁、唐夫人(崔氏婦)など)。そして、この林同は郭居敬と同じ福建の人であり、晩宋期に刊行されたことから、郭居敬の『詩選』の主要な典拠となったと推測している(葉涛『二十四孝初探』『山東大学学报(哲学社会科学版)』一九九六年第一期)。また〔金 二〇〇二〕。

(41) 〔金 二〇〇二〕。

(42) 「不弁」については、同じく蔡順の孝行について「此孝不弁ナルニ依テ食物ヲ以テ孝トスル也」とあり、財力がなく物事がうまく整わない意であろう。

(43) この場合、「高声では話せない、高声で話せば矢を帯びて帰るだろうから」のように、「不若」と反対の意味になる。

(44) 「(前略)時梵摩達王。遊獵而行見鹿飲水。挽弓射之。藥箭誤中睽摩迦身。被毒箭已。高聲唱言。一箭殺三人。斯痛何酷。其王聞其聲。尋以弓箭。投之於地。便即往看。誰作此言。我聞。此山中有仙人。名睽摩迦。慈仁孝順。養盲父母(後略)』『大正新修大藏經』第四卷・二〇三・四四七。

(45) 〔宇野 二〇一六〕第三章。

(46) このアトリビュート自体は、唐墓の樹下老人図に確認できるものも多く(孟宗と竹や筍、曾參の柴など)、唐代頃から形成されていったのではないかと推測できる(宇野(二〇一六年)前掲書第三章第二節、参照。唐墓の孝子図については、趙超「樹下老人」与唐代的屏風式墓中壁画』『文物』二〇〇三年第二期)に紹介されている。

(47) 川口久雄氏は敦煌出土の維摩詰經变文の本文を分析し、「①先ず経の題目を唱え、②次に経の本文の一条を誦し、③その文句を解釈敷衍し、④話の筋を華麗な七言の詩句をもって歌唱し、かくのごとく或は「白」話の散文③⑤、或は「断詩」の韻文④⑥

を相互に交錯せしめつゝ、叙述をすすめ、最後に「如何白仏也唱将来」——何とほとけに申されし、いざや唱わっしゃれというようなきまり文句の型において、一段を結び、あわせて次の段の講唱を催促し、⑦次の経文の段に誦し進めるのである」と説明されている（敦煌変文の性格とわが国唱導文学―説話と説教節の系譜―）『金沢大学法文学論集文学編』八、一九六一年一月。

(48) 〔金 一九八九及び一九九四〕。高橋文治「金元墓の孝子図と元曲」〔『未名』八、中文研究会、一九八九年二月〕。

(49) 李斉賢の元朝における活動については〔金 二〇〇七〕参照。

(50) 〔金 二〇一九〕注16。

(51) 張憲『玉笥集』（『粵雅堂叢書』本）巻五、十二頁。

(52) 謝應芳「龜巢稿」〔『四部叢刊』三編 巻十四、五五頁。「今觀郡人王達善所讀二十四孝、哀為一編。其間言孝感之事什有八九、且以孝經一章冠於遍。」

(53) 〔金 二〇一九〕注9参照。

(54) 『孝行録』に関わる図像は、李氏朝鮮刊『三綱行実図』孝子部の挿図に近いものであったことが推測されるが、例えば楊香図は元墓の壁画に描かれた構図とほぼ一致を見るものがある（『濟南市柴油機廠元代磚雕壁画墓』〔『文物』一九九二年第二期〕。また『三綱行実図』は縦長の挿図であり、その山水景の様式からは当時の仏伝系の山水図（屏風）と同様の絵を基にしているとの指摘もある（李泰浩・宋日基「初編本『三綱行実孝子図』の編纂過程程吳版画様式에 關한 研究」『書誌学研究』二五別冊、二〇〇三年六月）。

(55) 〔金 一九八六・一九九五〕。

(56) 唐墓の樹下老人図にも竹に泣く孟宗が見いだせることは、趙超（二〇〇三年）前掲論文において指摘されており、唐代には成立していたと考えてよいだろう。

(57) この場合、『詩選』の影響下になったとされる『日記故事』系統はみな座つて泣く墓に頻出するタイプの孟宗図なのであり、

『日記故事』系統の座っている孟宗図のパターンは、『詩選』より前からの流れを汲んでいるということが出来る。

(58) 〔宇野 二〇一六〕。

(59) 〔金 二〇一九〕の注9。

(60) 無論、そうした下絵のものは、『孝行録』において、もともと工人に描かせた絵に賛を着したように、書物としてではなく絵画として享受された場合も当然想定されよう。

(61) 金氏のご教示に拠る。〔金 二〇一九〕及び杉山正明・北川誠一『大モンゴルの時代』（中央公論社、一九九七年、二八五頁）に紹介されており、〔図7〕は後者より転載した。

(62) 金・大定二十九年（一一八九年）造営、『考古』（一九八四年第八期）。

(63) 梁音氏は台湾故宮博物院蔵写本『全相二十四孝詩選』の伝・詩について諸本比較を行っており、これまで『全相二十四孝詩選』については、龍大甲乙本を中心とした『新刊全相二十四孝詩選』を基本テキストとして扱ってきたが、洪武本と嘉靖本との伝・詩の違いに注意すべきである、という重要な指摘をされていた（梁音 二〇〇五）。

(64) 幼学の会編『孝子伝注解』（汲古書院、二〇〇三年）に書影、及び翻刻有り。

(65) 王重民編『敦煌變文集』（人民文学出版社、一九五七年）巻八所収の「孝子伝」。逸名の「孝子伝」とみなし得る五種の写本のうち、P二六二一（事森）を原巻として、その他に、S五七七六（甲）、S三八九（乙）、P三五三六（丙）、P三六八〇（丁）の四種で校勘した書である。このうち、乙丙丁には七言絶句がある。

(66) 林同「孝詩」には、『詩選』と共通する孝子についての五言絶句が見え、そのうち黄香の詩は『詩選』の典拠とみて間違いない（〔金 二〇〇一〕）。

【表1】『全相二十四孝詩選』諸本の五言絶句異同一覧

※「○」は諸本に異なること、「×」は丁が欠落していることを示す。

順序	孝子名	句	洪武本系	詩註本系	嘉靖二十五年刊本系	『日記故事』系
1	大舜	全	国家本(A)	詩註本(②)	斯道本(⑦)	和刻本『日記故事大全』
2	漢文帝	三	漢廷事賢母	漢帝事賢母	Aに同じ	漢廷事賢母
3	閔損	全	○	○	○	○
4	曾參	三	肩薪婦未晚	Aに同じ	○	○
5	王祥	一	繼母人間有	繼母人間在	Aに同じ	Aに同じ
6	老萊子	全	喜色滿庭闈	喜氣滿庭闈	Aに同じ	Aに同じ
7	丁蘭	二	形容在日身	Aに同じ	形容在日新	形容在日時
8	孟宗	三	須臾春筍出	Aに同じ	須臾春筍出	須臾冬筍出
9	黃香	二	炎天扇枕涼	Aに同じ	夏天扇枕涼	Aに同じ
10	董永	二	天妃陌上迎	Aに同じ	天姬陌上迎	仙姬陌上逢
11	姜詩	一	舍側甘泉出	舍側甘泉水	金(舍)側甘泉水	Aに同じ

24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12
陸績	楊香	田真	張孝	黃山谷	王裒	朱壽昌	郭巨	庾黔婁	劄子	吳猛	唐夫人	蔡順
一	全	一	位二	全	全	全	二	一	三	二	二	一
孝悌皆天性	○	海底紫珊瑚	代烹云瘦肥	×	×	×	×	○	若不高声語	蚊多不敢揮	乳姑晨盥梳	黑樞奉萱闈
Aに同じ	○	Aに同じ	代烹云瘦肥	○	○	○	埋兒願母有	○	Aに同じ	Aに同じ	Aに同じ	Aに同じ
孝弟皆天性	○	海庭紫珊瑚	Aに同じ	○	○	○	①に同じ	○	不敢高声語	蚊色不敢揮	乳姑晨興梳	Aに同じ
Aに同じ	○ (「惶」は誤)	海底紫珊瑚	Aに同じ	○	○ (「水」は誤)	○	⑦に同じ	○	Aに同じ	②に同じ	Aに同じ	Aに同じ
Aに同じ	○	Aに同じ	Aに同じ	○	○	○	埋兒願母存	○	Aに同じ	Aに同じ	Aに同じ	黑樞奉親闈
Aに同じ	○	Aに同じ	Aに同じ	○	○	○	⑦に同じ	○	若不高声叫	Aに同じ	Aに同じ	⑦に同じ
(含飴↓乳哺)	(身↓離)	ナシ	ナシ	(下二句異なる)	○	○	⑦に同じ	(啓↓起)	Aに同じ	Aに同じ	Aに同じ	Aに同じ

元・郭居敬撰『全相二十四孝詩選』系諸本の成立と展開について